

K.フォレット新作「NEVER」を読んで

理事長 皆川 芳嗣

ロシアによるウクライナ軍事侵攻は我々人類が累卵の危うさの上で生きていることを改めて思い出させた。しかし、開戦から5か月がたち、ミサイルが飛び交う戦場の悲惨な報道映像にも人々が徐々に馴れてきてしまっていることに愕然とする。今回の戦争は戦場もウクライナに限定されているし、通常兵器で戦われているのでエスカレーションの危険性は大きくないのではと楽観視する向きもあるが果たしてそうだろうか？ロシアの軍事ドクトリンは戦術核の先制使用を否定していないし、日本の隣国には核の恐怖の均衡を破ることを躊躇しない可能性のある国が存在する。そんなことを考えている時手にとったのがイギリスの作家K.フォレットの新作である。

フォレットは第二次世界大戦の帰趨を決めたと言われるノルマンディー上陸作戦の裏で行われていた欺瞞作戦をドイツのスパイの視点で描いた「針の目」でメジャーデビューした作家だ。その後ベストセラーを連発したのちイングランドの中世を描いた「大聖堂」三部作で世界的人気作家となった。彼が第一次世界大戦の頃に題材をとって「巨人たちの落日」を執筆した際、この大戦が誰一人欲していない戦争だったこと、どちら側の指導者もそんな戦争を起こす意図をもっていなかったことに気づいた。小さな偶発事件と些末な行き違いが悲劇的な結末への引き金を引いてしまった訳だが、同じことが再現される恐れはないのだろうかと思い執筆したのが「NEVER」である。

この小説の舞台は現代、冒頭アメリカの女性大統領であるポーリーン・グリーンが核戦争時に指揮を執ることになる地下深くに築かれた要塞のような施設を訪問するところから始まる。こんな施設のご厄介にならないよう政治・外交が頑張らねばと彼女は思うのだが、中央アフリカのチャド共和国での小規模な武力衝突がチャドと隣国スーダンの背後にいるアメリカ、中国を巻き込む大きな紛争へと拡大していく。米中双方の指導層とも紛争の拡大化を防ぐべく必死の交渉を水面下で繰り広げるのだが、それぞれの国の軍や世論迎合の政治家に阻まれ上手くいかない。そんな中、北朝鮮でクーデターが勃発したことにより両国の指導層の意図を超えて世界は誰もが望んでいない最悪の結末へと雪崩を打って進んでしまう。

フォレットが本作を書いたのはウクライナ軍事侵攻の前で、米中経済摩擦、中国の南シナ海人工島建設、尖閣列島を巡る日中の緊張の増大、アメリカの航行の自由作戦、北朝鮮のミサイル発射実験などに触発されたからのようだ。本作はフィクションだが現代の世界が極めて危うい均衡の上にあり、少しのバランスの変化でいつでも悲劇的な結末を招来しかねないことを圧倒的臨場感で描き出している。

現在国際連合は常任理事国を中心とした安全保障体制をとっているが、今回のロシアによるウクライナ軍事侵攻はその前提を根底から揺るがしている。まずは戦争を早く終わらせねばならないが、その後を見据えた国際的安全保障の枠組みの議論も待ったなしだと思うのである。来年のG7サミットは広島で開催されることになった。青臭い議論と言われるかもしれないが、唯一の被爆国として日本が核抑止・廃絶に向けて世界の安全保障議論に一石を投じてもらいたいものである。子や孫の世代にこんな恐ろしい世界をそのままに残したくない。悲劇は「NEVER」だ。